

# 宮城県稲作情報

宮城県米づくり推進本部  
(事務局 宮城県農政部みやぎ米推進課)

令和元年 7 月 16 日 発行

第 2 号

編 集 者

宮城県古川農業試験場

発 行 所

公益社団法人 みやぎ農業振興公社

## 気象経過と生育の特徴

- 6 月中下旬の気温は平年並、日照時間は中旬多く、下旬は少ない。
- 7 月 1 日現在の生育状況は草丈と茎数は平年並、葉数と葉色は平年をやや上回り、1 日程度生育は早い。
- 生育予測モデルによる北部平坦部中生品種の出穂期予測は 8 月 2 日頃の見込み (平年値 8 月 3 日)。
- 土壌窒素発現量は平年よりも 5 月は少なく 6 月はやや多いか平年並。
- 稲体窒素吸収量は平年より多い。

## これからの栽培管理の要点

- 最新の気象情報に留意。
- 低温時は深水管理で幼穂を保護。
- 追肥は稲の生育、葉色等を見て適切に実施。
- いもち病防除の徹底。
- 斑点米カメムシ類の防除対策の徹底。

### 【大豆】

- 中耕培土の実施。
- 雑草防除対策の実施。

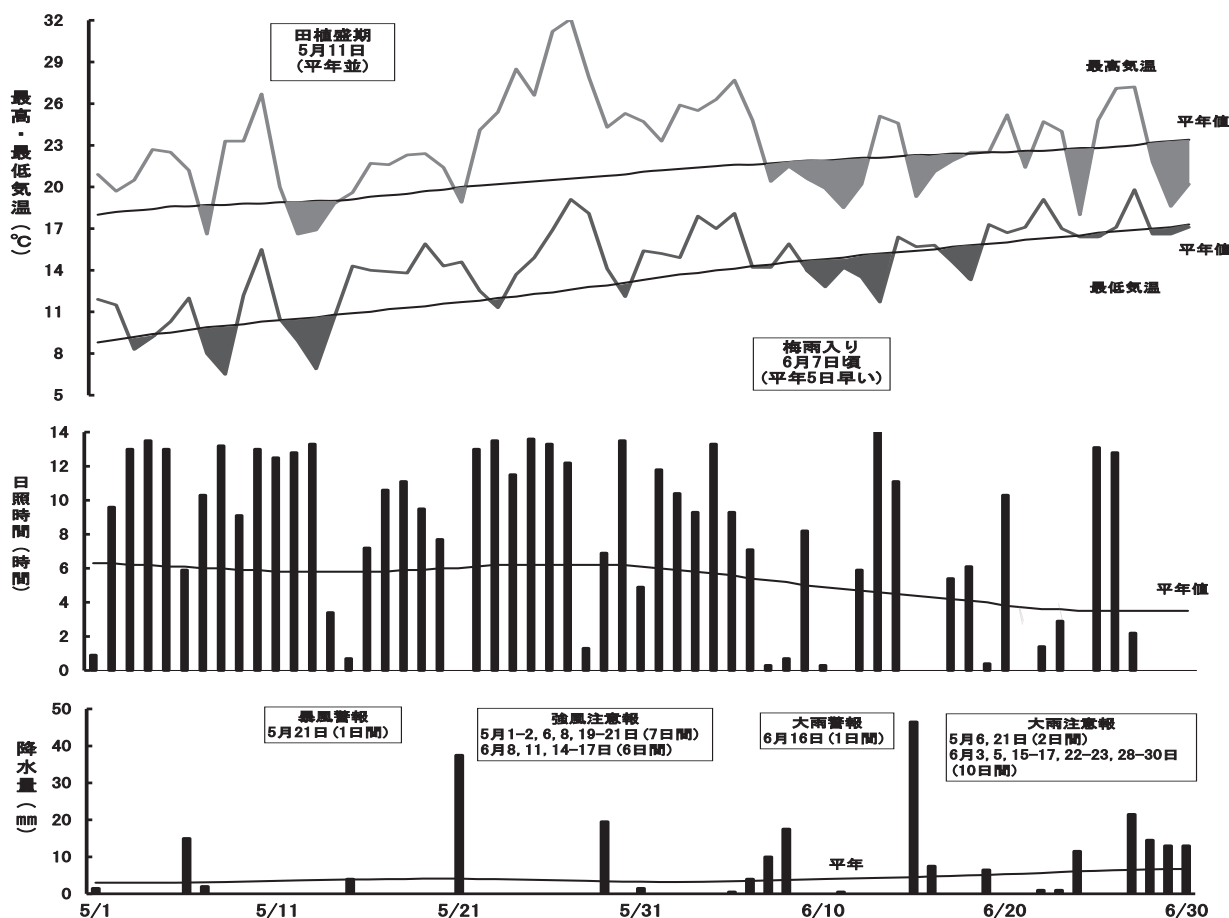


図 1 気象経過 (観測地点: 仙台アメダス, 5 月 1 日~6 月 30 日)

# 気象経過

## 6月中下旬の気温と日照時間は、ほぼ平年並

### 【6月中旬・下旬の気象経過】

- ・6月中旬の平均気温は低い～平年並、降水量及び日照時間は平年並～多い。
- ・6月下旬の平均気温は平年並、降水量は平年並～多く、日照時間は少ない～平年並。
- ・仙台アメダスにおける6月中旬の平均気温は18.3℃（平年差-0.2℃）で平年並、降水量は61mm（平年比131%）、日照時間は53.3時間（平年比120%）で平年より多い。6月下旬の平均気温は19.8℃（平年差+0.5℃）で平年より高く、降水量は75.5mm（平年比115%）で平年より多く、日照時間は32時間（平年比97%）で平年並（表1）。

表1 6月中旬・下旬の気象表（各アメダス地点）

地点	6月中旬（6/11-20）				6月下旬（6/21-30）			
	平均気温（℃）		積算日照時間（hr）		平均気温（℃）		積算日照時間（hr）	
	本年	平年差	本年	平年比	本年	平年差	本年	平年比
気仙沼	16.4	▲0.7	52	97	17.8	▲0.3	26	61
川渡	16.6	▲1.0	47	96	18.5	0.2	19	47
葉館	17.7	▲0.7	49	110	19.4	0.2	23	64
米山	17.9	▲0.5	55	106	19.5	0.3	29	69
古川	17.8	▲0.8	52	104	19.5	0.1	25	64
石巻	17.4	▲0.3	58	117	18.9	0.2	31	80
仙台	18.3	▲0.2	53	120	19.8	0.5	32	97
白石	17.5	▲1.1	47	97	19.1	▲0.1	25	70
亶理	17.6	▲0.6	50	104	19.3	0.2	35	93
丸森	18.2	▲0.4	51	118	20.1	0.7	35	100

注）平年値は30か年（昭和56～平成22年）平均値

# 本田の生育経過

（7月1日現在）

## 草丈と茎数は平年並、葉数と葉色は平年をやや上回る

### 【県内生育調査ほの生育状況】

- ・主要品種別の生育状況は、6月20日現在の「ひとめぼれ」では、草丈が35.1cm（平年比97%）、葉色が42.7（平年差-0.1）と平年並、茎数は414本/m<sup>2</sup>（平年比104%）、葉数は8.6枚（平年差+0.2枚）と平年を上回った。
- ・7月1日現在の「ひとめぼれ」は、草丈が48.7cm（平年比98%）、茎数が555本/m<sup>2</sup>（平年比101%）と平年並、葉数は10.0枚（平年差+0.1枚）、葉色は43.2（平年差+0.7）と平年をやや上回った（表2、図2）。
- ・7月1日現在の「だて正夢」は、草丈が53.3cm（前年比96%）、茎数が516本/m<sup>2</sup>（前年比103%）、葉数が10.0枚（前年差±0枚）とほぼ前年並、葉色は44.6（前年差+1.1）と前年を上回った（表3）。

表2 主要品種別の生育状況（6月20日及び7月1日現在）

（県内生育調査ほ）

品種	項目	草丈（cm）		茎数（本/m <sup>2</sup> ）		葉数（枚）		葉色（GM値）	
		6/20	7/1	6/20	7/1	6/20	7/1	6/20	7/1
ひとめぼれ	本年	35.1	48.7	414	555	8.6	10.0	42.7	43.2
	前年比（差）	102	97	108	100	0.4	▲0.1	2.8	0.6
	平年比（差）	97	98	104	101	0.2	▲0.1	▲0.1	0.7
ササニシキ	本年	34.9	47.2	480	645	8.8	10.3	41.7	42.7
	前年比（差）	106	98	123	109	0.7	0.3	2.8	1.8
	平年比（差）	100	98	120	106	0.6	0.4	0.4	1.9
まなむすめ	本年	38.2	49.5	465	582	8.3	9.7	41.6	43.1
	前年比（差）	104	95	118	99	0.8	0.4	0.5	0.3
	平年比（差）	106	103	116	102	0.7	0.6	▲1.6	1.5
県平均	本年	35.4	48.4	432	576	8.6	10.0	42.4	43.1
	前年比（差）	103	97	112	102	0.5	0.0	2.6	0.9
	平年比（差）	98	98	109	102	0.3	0.2	0.1	1.1

注1）平年差比は過去5か年（平成26～30年）の平均値との差比、▲は平年差「-」  
2）葉色（GM値）は、SPAD502plusで測定した値

表3 「だて正夢」の生育状況（6月20日及び7月1日現在）

（県内「だて正夢」調査ほ）

品種	項目	草丈（cm）		茎数（本/m <sup>2</sup> ）		葉数（枚）		葉色（GM値）	
		6/20	7/1	6/20	7/1	6/20	7/1	6/20	7/1
だて正夢	本年	39.1	53.3	381	516	8.1	10.0	43.2	44.6
	前年差比（差）	104	96	115	103	0.5	0.0	0.7	1.1

注1）県内9か所の調査ほと作況試験ほの平均値  
2）葉色（GM値）は、SPAD502plusで測定した値

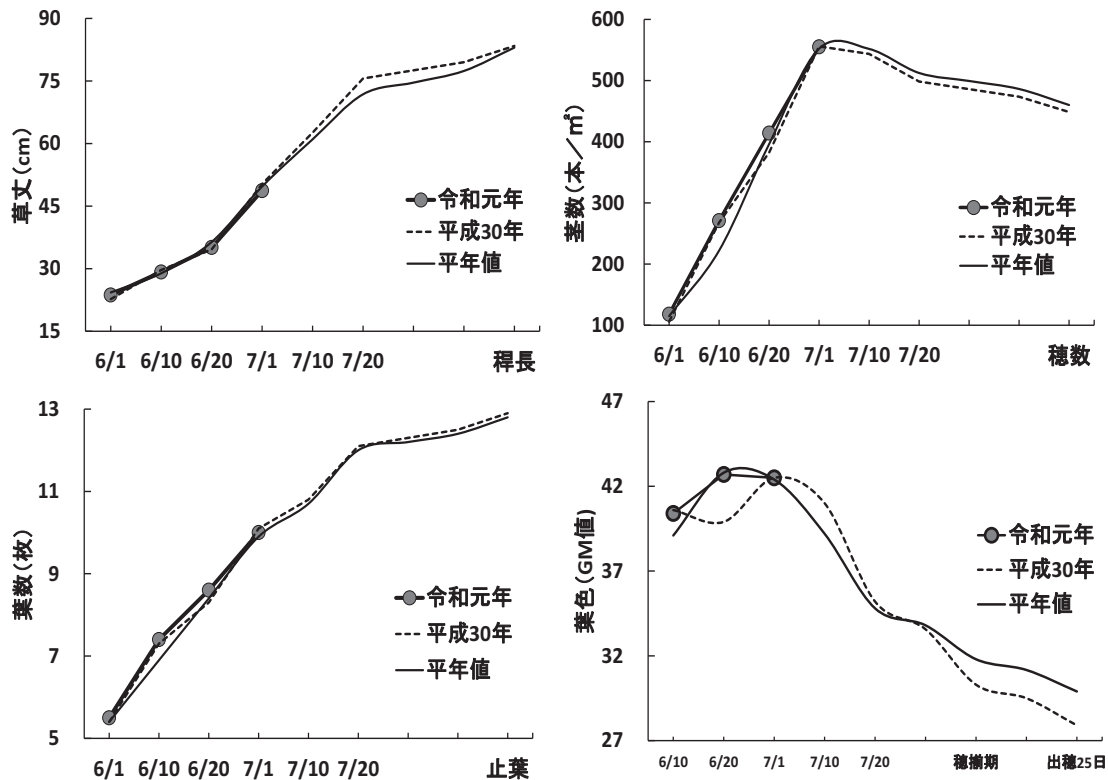


図2 生育調査ほ「ひとめぼれ」生育状況（左上：草丈，右上：茎数，左下：葉数，右下：葉色）

【作況試験ほの生育状況】

- ・ 5/10 移植「ひとめぼれ」では、6月20日現在で草丈が平年比98%と平年並、茎数は平年比129%、葉数は平年差+0.3枚と平年を上回り、葉色は平年差-2.6と平年を下回った。
- ・ 7月1日現在では、草丈が平年比95%、茎数が平年比97%、葉色が平年差-0.1とほぼ平年並。葉数は平年差-0.2枚と平年をやや下回った（表4）。

表4 主要品種別の生育状況（6月20日及び7月1日現在）

（古川農試作況ほ）

移植月日	品種	項目	草丈 (cm)		茎数 (本/㎡)		葉数 (枚)		葉色 (GM値)	
			6/20	7/1	6/20	7/1	6/20	7/1	6/20	7/1
5/1	ひとめぼれ	本年	33.4	46.9	566	631	8.2	9.4	44.3	43.2
		前年比(差)	92	90	90	80	0.0	▲0.6	▲0.5	▲0.2
		平年比(差)	91	95	108	96	▲0.3	0.0	▲1.3	0.3
5/10	ひとめぼれ	本年	33.4	45.2	592	642	8.2	9.3	42.9	43.2
		前年比(差)	102	94	127	91	0.5	▲0.2	0.0	0.1
		平年比(差)	98	95	129	97	0.3	▲0.2	▲2.6	▲0.1
	ササニシキ	本年	31.3	42.2	555	640	8.1	9.3	41.3	41.6
		前年比(差)	98	90	106	83	0.5	▲0.1	0.1	▲0.9
		平年比(差)	95	92	108	85	0.3	0.0	▲2.8	▲0.3
	まなむすめ	本年	35.8	47.1	514	620	8.2	9.4	40.8	41.9
		前年比(差)	102	97	114	97	0.6	0.0	0.8	0.6
		平年比(差)	99	98	128	109	0.6	0.3	▲2.4	0.3
	つや姫	本年	30.2	40.0	387	535	7.9	9.1	42.9	44.7
		前年比(差)	99	89	98	82	0.3	▲0.4	▲0.4	▲0.5
		平年比(差)	96	93	104	90	0.3	0.0	▲2.9	0.2
だて正夢	本年	37.3	50.2	405	496	8.3	9.6	43.9	44.6	
	前年比(差)	109	95	105	77	0.8	0.0	▲0.2	▲1.9	
	平年比(差)	91	94	108	85	0.3	0.3	▲2.2	1.4	
5/20	ひとめぼれ	本年	26.0	40.6	305	542	7.2	8.9	41.1	45.1
		前年比(差)	98	94	90	80	0.5	▲0.2	1.6	0.1
		平年比(差)	91	94	108	85	0.3	0.3	▲2.2	1.4
	ササニシキ	本年	26.9	39.9	315	588	6.9	8.7	40.1	43.4
		前年比(差)	97	96	90	79	0.3	▲0.2	2.4	▲1.9
		平年比(差)	94	96	88	88	0.3	0.2	▲1.6	0.3

注1) 平年差比は過去5か年（平成26～30年）の平均値との差比、▲は平年差「-」  
 2) 「だて正夢」の平年値はない  
 3) 葉色 (GM値) は、SPAD502plusで測定した値

土壤窒素発現量は平年よりも5月は少なく、6月はやや多いか平年並、稲体窒素吸収量は平年より多い。

【土壤窒素発現量】

古川農業試験場内の5月8日移植のほ場埋め込み培養試験における旬ごとの土壤窒素発現の増加量の推移は、化成肥料区で移植後から5月下旬にかけて平年よりも少なかったが、6月上旬は上回り、6月中旬は平年並であった。牛ふん堆肥区も同様の傾向であった（図3）。

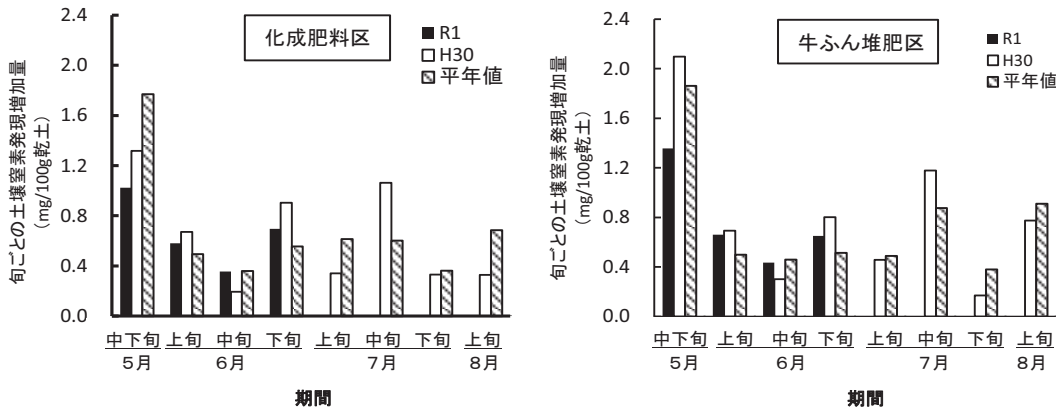


図3 ほ場埋め込みによる土壤窒素発現量

- 注1) 化成肥料区は平成15年からは基肥窒素量を5kg/10aとして連用、牛ふん堆肥区は化成肥料に加えて牛ふん堆肥を約1t/10a連用（農地土壤炭素貯留等基礎調査事業ほ場）
- 注2) 施肥前に採土し（採土日：平成29年4月14日、平成30年4月10日、平成31年4月19日）、調製・冷蔵保管後、水稻移植日に埋め込み
- 注3) 旬ごとの土壌発現増加量は、各旬（約10日間）に増加した土壤窒素発現量を示す
- 注4) 平年値は平成26年～平成30年の5年間における平均値

【施肥窒素】

化成肥料区における土壤中残存アンモニア態窒素量は、6月28日現在では36%で平年よりも早い減少傾向を示している。肥効切れは7月第1半旬頃になる見込みである（図4）。

【稲体窒素吸収量】

- 7月1日現在の推定窒素吸収量の平均値（生育調査ほ・作況試験ほ「ひとめぼれ」）は、3.9g/m<sup>2</sup>と昨年の4.1g/m<sup>2</sup>よりも低いですが、平年値（過去5年間）の3.8g/m<sup>2</sup>よりも多い（図5）。田植盛期である5月11日の窒素吸収量は3.9g/m<sup>2</sup>であり、昨年の盛期である5月11日の4.5g/m<sup>2</sup>に対して87%で、田植始期（5月4日）、終期（5月22日）においても昨年と比較してそれぞれ92%、102%となっている。5月上旬田植のほ場では窒素吸収量のばらつきが散見されるものの、いずれの田植期でも生育の進みを反映して稲体の窒素吸収は概ね順調に進んでいる。
- 7月1日現在の葉色値（SPAD502plus）の平均値（生育調査ほ「ひとめぼれ」）は43.2と昨年の42.5、平年値の42.4と同程度となっている（図6）。本年は7月1日調査時点で平年と同様に推移している。

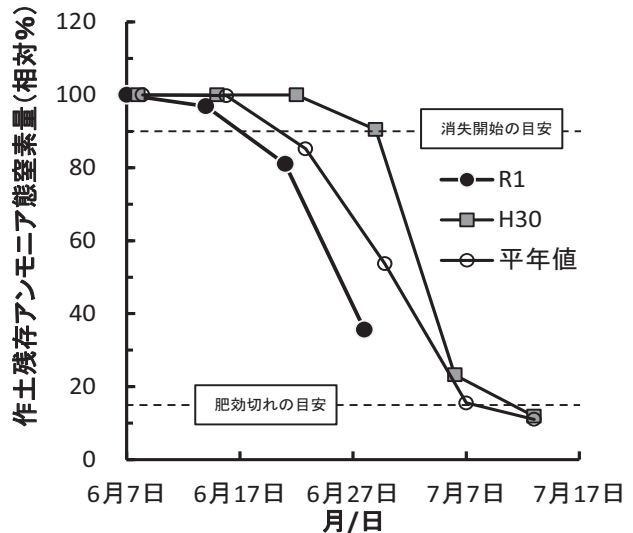


図4 土壤中残存アンモニア態窒素量の消失経過

- 注1) 残存アンモニア態窒素量は、株間および条間の中央部から採取した作土中のアンモニア態窒素量 (mg/100g乾土) とし、移植後の最も高い値を100とした相対割合で示した
- 注2) 図3の化成肥料区
- 注3) 平年値の月/日と残存アンモニア態窒素量は平成26年～平成30年の5年間における平均値

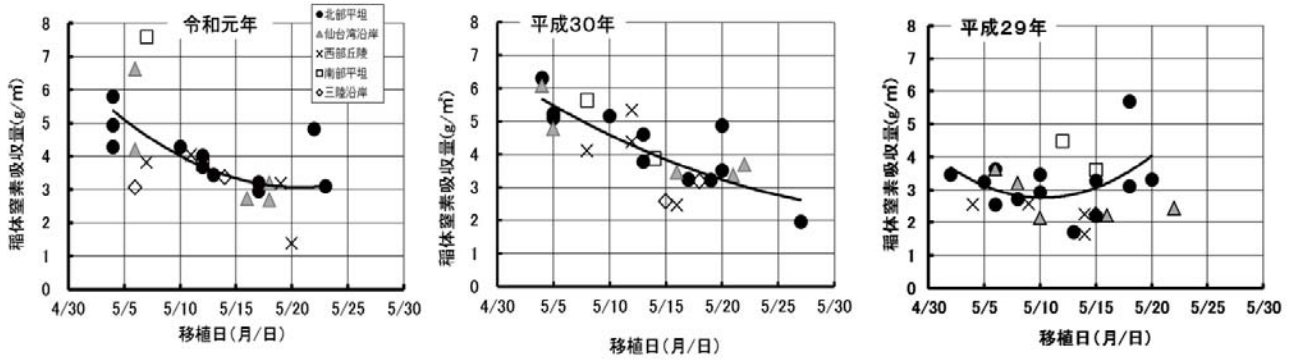


図5 移植時期別の稲体窒素吸収量の比較(「ひとめぼれ」生育調査ほ)

注)稲体窒素吸収量は、草丈、茎数、葉色及び移植後の有効積算気温から推定  
 気温は農研機構のメッシュ農業気象データシステムから得た  
 回帰曲線は全地帯区分のデータから得た

## 病害虫の発生予測

(発生予測情報：7月5日発表)

### 【いもち病】

- ・葉いもちの全般発生期は平年よりやや早い  
7月第3半旬、発生量は平年並と予想される。

### 【紋枯病】

- ・発生量は平年並と予想される。

### 【稲こうじ病】

- ・発生量は平年並と予想される。

### 【斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）】

- ・第1世代成虫発生盛期は平年よりやや遅い7月第5半旬、発生量は平年並と予想される。

### 【イナゴ類（コバネイナゴ）】

- ・発生量は多いと予想される。

※詳細は宮城県病害虫防除所のWebサイトを参照願います(最終ページにURL記載)。

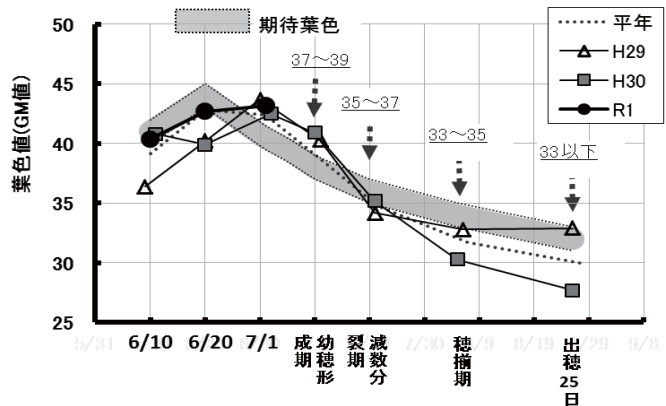


図6 葉色の推移 (ひとめぼれ生育調査ほ)

## これからの栽培管理の要点

### 出穂期予測<北部平坦部> 8月2日頃 (平年8月3日)

表5 地帯区別生育ステージの予測 (7月1日現在)

地帯区分	田植時期		幼穂形成始期			減数分裂期			出穂期		
	始期	終期	始期	終期	始期	終期	始期	穂揃期			
北部平坦	5/2	5/19	7/2	7/11	7/12	7/21	8/1	8/7			
南部平坦	5/3	5/19	7/2	7/11	7/12	7/21	7/31	8/6			
仙台湾岸	5/3	5/23	7/2	7/14	7/12	7/24	7/31	8/9			
西部丘陵	5/7	5/26	7/6	7/16	7/16	7/26	8/4	8/12			
山間高冷	5/7	5/27	7/14	7/22	7/24	8/1	8/13	8/20			
三陸沿岸	5/7	5/25	7/10	7/17	7/20	7/27	8/8	8/14			

※1)6月30日までアメダスデータ実測値使用, 7月1日以降はアメダス平年値を使用

2)対象品種「ひとめぼれ」「ササニシキ」「やまのしずく(山間高冷)」

3)各生育ステージの幅は、各地帯区別の田植始期～田植終期で予測

### 【今後の水管理】

- ・中干しは、遅くとも幼穂形成期前に終了する。
- ・中干し実施ほ場は、酸化状態にあるので、中干し後すぐに湛水状態にすると急激に還元が進み根を傷めるので、中干し後は1～3日程度走り水をしてから間断かんがいをする。
- ・根腐れが発生しやすく倒伏の危険のある水田は、落水期まで、飽水管理することにより、根の健全化と茎の充実を図る。

### 【低温時の水管理】

- ・幼穂形成始期から減数分裂期にかけて日平均気温 20℃以下、または日最低気温 17℃以下が続く場合は、早急に深水管理を行う。
  - 幼穂形成始期（幼穂長 1～2mm）：幼穂の伸長に合わせ段階的に水深を 5～10cm 程度の深水管理。
  - 減数分裂期（幼穂長 3～12cm）：できる限りの深水管理（水深 20cm が望ましい）
- ・深水が保てるよう畦畔等の補修を行い、地域として深水かんがいができる用水管理体制を整える。

### 【出穂後の水管理】

- ・品質が低下しやすい出穂後 5～15 日に最低気温 23℃以上が連続する場合、白未熟粒が多発し、品質の著しい低下を招く危険性があるので、根の活力維持や同化物質の転流促進を図るため以下の対策を実施する。
  - 「昼間深水・夜間落水管理」：晴天等の高温時において昼間はできるだけ深水管理とし、夜間は逆に落水管理とする水管理方法。一日の用水温の推移を見ると、気温よりも数時間遅れて水温の低下が見られるので午前 9～10 時頃にかんがいし、気温が用水温を下回り始める午後 4 時頃に落水するのが望ましい。
  - 走水等により土壌を常に湿潤状態に保つ保水管理：出穂後の水管理を保水管理で維持することによって、昼間深水・夜間落水管理ほどの効果は得られないが、湛水管理に比べれば乳白粒や胴割粒の発生が軽減できる。

### 【追肥】

- ・生育ステージの予測を表 5 に示したが、幼穂長等で幼穂形成始期・減数分裂期等を確認し追肥時期を決め、穂肥要否の判定を行う（表 6、表 7、表 8）。
- ・基肥に緩効性肥料（長期溶出型の被覆尿素肥料等）を適正量施用した場合は、原則として穂肥は行わない。ただし、減数分裂期の葉色値（葉緑素計値）が 33 以下の場合は追肥を検討する。
- ・復元田での追肥は原則として行わない。倒伏の恐れがある場合は、倒伏軽減剤の使用も検討する。

表 6 幼穂形成始期及び減数分裂期の葉色の目安

品種名	幼穂形成始期（出穂25日前）		減数分裂期（出穂15日前）	
	カラースケール	葉緑素計値	カラースケール	葉緑素計値
ひとめぼれ	4.2～4.5	37～39	3.9～4.2	35～37
ササニシキ	—	—	3.4～3.7	32～34
まなむすめ	3.9～4.2	35～37	—	—

※1)この表の数値以下で追肥可能だが、倒伏診断指標を必ず併用して要否判断すること

2)葉緑素計値は「SPAD502」で測定した値

表 7 追肥の目安（宮城県主要奨励品種）

品種名	追肥時期別及び施用量（窒素成分量）	
	幼穂形成始期（出穂25～20日前） [幼穂長：1～2mm]	減数分裂期（出穂15～10日前） [幼穂長：3～12cm]
ひとめぼれ	1.0kg/10a	1.0kg/10a
ササニシキ	—	1.0～1.5kg/10a
まなむすめ、つや姫	2.0kg/10a	—
みやこがねもち	—	1.0kg/10a

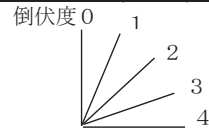
※(参考) だて正夢：減数分裂期 2.0kg/10a（または幼穂形成期 1.0kg/10a＋減数分裂期 1.0kg/10a）

表8 幼穂形成期および減数分裂期の倒伏指標（「ひとめぼれ」「ササニシキ」）

幼穂形成期(草丈×m <sup>2</sup> 茎数×葉色; 10 <sup>5</sup> )							減数分裂期(草丈×m <sup>2</sup> 茎数×葉色; 10 <sup>5</sup> )									
茎数 (本/m <sup>2</sup> )	草丈 (cm)	葉緑素計値(SPAD502型)					倒伏 危険域	I	II	III	I	II	III	I	II	III
		38	40	42	44	46										
600	50	11.4	12.0	12.6	13.2	13.8	14.4									
600	55	12.5	13.2	13.9	14.5	15.2	15.8									
600	60	13.7	14.4	15.1	15.8	16.6	17.3	倒伏								
600	65	14.8	15.6	16.4	17.2	17.9	18.7	危険域								
600	70	16.0	16.8	17.6	18.5	19.3	20.2	I								
600	75	17.1	18.0	18.9	19.8	20.7	21.6	II								
600	80	18.2	19.2	20.2	21.1	22.1	23.0	III								
700	50	13.3	14.0	14.7	15.4	16.1	16.8									
700	55	14.6	15.4	16.2	16.9	17.7	18.5									
700	60	16.0	16.8	17.6	18.5	19.3	20.2	I								
700	65	17.3	18.2	19.1	20.0	20.9	21.8	II								
700	70	18.6	19.6	20.6	21.6	22.5	23.5	III								
700	75	20.0	21.0	22.1	23.1	24.2	25.2									
700	80	21.3	22.4	23.5	24.6	25.8	26.9									
800	50	15.2	16.0	16.8	17.6	18.4	19.2	I								
800	55	16.7	17.6	18.5	19.4	20.2	21.1	II								
800	60	18.2	19.2	20.2	21.1	22.1	23.0	III								
800	65	19.8	20.8	21.8	22.9	23.9	25.0									
800	70	21.3	22.4	23.5	24.6	25.8	26.9									
800	75	22.8	24.0	25.2	26.4	27.6	28.8									
800	80	24.3	25.6	26.9	28.2	29.4	30.7									
900	50	17.1	18.0	18.9	19.8	20.7	21.6	II								
900	55	18.8	19.8	20.8	21.8	22.8	23.8	III								
900	60	20.5	21.6	22.7	23.8	24.8	25.9									
900	65	22.2	23.4	24.6	25.7	26.9	28.1									
900	70	23.9	25.2	26.5	27.7	29.0	30.2									

倒伏危険域

- I 倒伏度2を超える確率5~20%
- II 倒伏度2を超える確率20~50%
- III 倒伏度2を超える確率50%以上



【いもち病】

- ・箱施用剤による予防防除を行っていない場合は、ただちに水面施用剤による防除を行う。
- ・追肥後は、一時的にいもち病に対する抵抗力が弱まるので、葉いもち予防に箱施用剤や水面施用剤を処理したほ場でも、薬剤の効果が低下する7月中旬以降の葉いもちの発生に注意する。上位葉での葉いもちも穂いもちの直接的な伝染源となるので、発生が確認された場合はただちに茎葉散布剤による防除を行う。
- ・穂いもち予防のために、出穂期予測に応じて適期に水面施用剤による防除を行う。

【紋枯病】

- ・高温・多雨の場合は多発が懸念されるため、前年多発したほ場では発生状況に注意し、要防除水準を参考に防除を実施する。要防除水準は、減収率5%（被害発生確率50%）の場合、穂ばらみ期（出穂直前）の発病株率がひとめぼれ18%、ササニシキ10%、コシヒカリ29%以上となっているので、この水準を参考に茎葉散布剤により防除を行う（宮城県、普及に移す技術第90号、参考資料）。

【稲こうじ病】

- ・高冷地や中山間地、晩生品種、窒素を多用した水田等で発生しやすい。本病は穂のみに発生し、出穂前の予防防除が必要であるため、銅粉剤で出穂前20~10日頃、水面施用剤で出穂前までに防除を行う。

【斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）】

- ・アカスジカスミカメの繁殖地となる牧草地では、7月中旬までに刈り取りを行う（宮城県、普及に移す技術第81、82号、参考資料）。
- ・畦畔や農道の草刈りは、遅くとも出穂の10日前までに行う。
- ・草刈りは広域的に実施することでより高い効果が期待できるので、地域内で協力して一斉に行うよう努める。

【イナゴ類（コバネイナゴ）】

- ・前年の発生量が多いほ場では、発生状況に注意し、本田侵入盛期頃（7月第3半旬）に畦畔沿いの稲を中心に薬剤を散布する。

### 【雑草防除対策】

- ・後発生する雑草の草種及び葉齢を確認し、必要に応じて適切な剤を適期に散布する。
- ・ベンタゾン液剤（大豆バサグラン（ナトリウム塩）液剤）を散布する場合は、開花前に早めに散布する。なお、散布後24時間内の日照が少ない場合や夕方以降に散布した場合に効果が著しく劣ることがあるので留意する。
- ・フルチアセットメチル乳剤（アタックショット乳剤）を散布する場合は、大豆に必ず薬害を生じ、場合により減収することがあることを理解し、ほ場に発生している雑草種、葉齢及び量を考慮した上で使用を検討する。

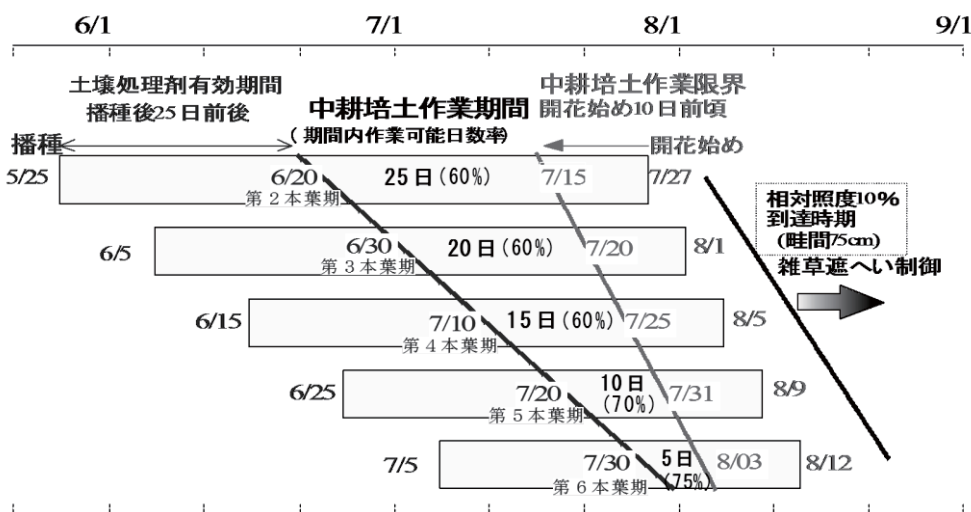
※除草剤使用の際は最新の情報（<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html>）を確認し、農薬容器のラベルにある使用方法を遵守する。

### 【中耕培土】

- ・中耕培土が遅れると機械との接触により茎葉の損傷や断根が生じるので、開花期の10日前までに終わる（図7）。標播（～6月上旬播種）では、1回目を本葉2～3葉期に子葉節の高さまで、2回目を本葉6～7葉期に初生葉が隠れる高さまで、晩播（6月中旬～播種）では、本葉5～6葉期に子葉節が隠れる高さまでを目安として行う。
- ・株元に土がよらないM字型培土は逆に悪影響となる場合があるので、培土の形状や収穫作業への影響を考慮して作業機の調整・速度に注意する。

### 【追肥】

- ・ほ場の地力が低い場合や湿害などで根が浅い場合は、培土と同時に緩効性肥料（LP40）を窒素成分量で5kg/10a程度施用する。



### —農薬危害防止運動実施中（6月1日～8月31日）—

農薬による事故を未然に防ぎ、消費者の皆さんに安全・安心な農作物を届けるため、農薬は適正に使用しましょう。

稲作情報や発生予察情報をより早くご利用いただけるよう、下記の方法による提供を行っております。また、内容に関するお問い合わせは古川農業試験場（0229-26-5100）までご連絡ください。

- 【稲作情報：古川農業試験場】 <http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/hk-nousi/>
- 【発生予察情報：病虫害防除所】 <http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/byogai/>
- 【気象予報：仙台管区气象台】 <http://www.jma-net.go.jp/sendai/>

（次回発行 7月30日予定）